

国

語

●満点100点 ●時間50分

一 次の各文の——をつけた漢字の読みがなを書け。

- (1) 恵みの雨が乾いた大地を潤す。
- (2) 花壇に咲くバラがほのかに香る。
- (3) 校庭の芝生で憩いのひと時を過ごす。
- (4) バスの車窓から雪をいただく山々を望む。
- (5) 厳しい練習に耐えて勝利の栄冠を手にする。

二 次の各文の——をつけたかたかなの部分に当たる漢字を楷書かいしよで書け。

- (1) 美しい琴のシラベが聴衆を魅了する。
- (2) うぐいすの鳴くバイリンを散策する。
- (3) 新人作家が文学賞を受賞し、脚光をアビる。
- (4) 秋の古都で鐘の音を聞きながらハイクを作る。
- (5) 大地震のヨチヨウをとらえるための研究が進む。

三 次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。(＊印のついている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。)

眼下に工場群が立ち並び、いくつもの白煙が昇っていた。その工場群のむこうに夕陽ゆうひにかがやく海がひろがっていた。右方には旧市街が、左方には住宅街が連なっていた。

ボクたち四人は黄金色に染まる街並、工場、煙突、家並を見ながら、いつかこの世界の中に自分たちは踏み出し、大人になるのだらうと思った。

海からの風がボクたちの頬ほおをやさしく撫なでていた。振りむくと坂

下にボクたちの野球場がぼつんとあった。

坂の頂上は子供の世界と大人の世界の＊ボーダーだったのかもしれない。でもボクたちにはそんなことはわかるはずがなかった。

二年前の夏のはじめ、坂下の原っぱに最初に立っていたのはケイタだった。

ボクは生い茂る夏草の中で、一人ボールを空に放りながら追いかけている少年を見つけた。ボクは彼が何をしているかすぐにわかった。それはボクが毎日この河原でしていたことと同じだったからだ。彼は空とキャッチボールをしていた。引力という名前の相手と。

(1) ボクたちは互いが手にしたグローブを見て笑い出し、その日からキャッチボールをはじめた。暴投をしてもそのボールを笑いながら拾いに走ってくれる仲間ができた。ケイタは同じ歳なのにボクより十センチも身長が高く、彼が投げるボールはボクの倍近く遠くに届いた。その夏が半分過ぎた頃ころ、もう一人の少年があらわれた。ケイイチだった。彼はグローブを持っていなかったが、ボクたち以上に野球が大好きだった。

夏の後半はキャッチボールにバットが加わってのゲームにかわった。ケイタの打球は驚くほど空高く舞い上がり、イヤになるほど遠くに飛んだ。左ききのケイイチはどんなボールも器用にバットに当て、一瞬ボールが消えたのではと思ってしまうような変化球を投げた。ケイタのバットが空を切り、ドスンと尻餅しりもちをつくほどだった。

ボクは相変あひかわらずキャッチボールでは暴投し、守備してもトンネルをくり返していた。その上ボールはなかなかバットに当あたってくれなかった。

「ケイジ、ドンマイ、ドンマイ。」

二人はいつもそう言っ**て**ボクを励あましてくれた。

夏が終おわりに近づいた昼下ひるがり、＊ポニーテールで＊ピンストライプのユニフォームにスカートはを穿はいたナホミがあらわれた。

「仲間に入れてよ。」

ボクたちはゲームを中断し、ポニーテールを見た。

「迷惑はかけないから。それに四人で遊んだ方がチーム戦もできるんじゃない?」

ボクたちは顔を見合わせ、ポニーテールに訊いた。

「どういうこと?」

ポニーテールはことまかに*三角ベースボールのルールを説明した。ボクたちは目をかがやかせた。どうして女の子の君がこんなに野球に詳しいの、なんて訊かなかった。だってそのルールは最高だったから。

ボクたちは自己紹介した。聞いていたポニーテールが言った。

「へえー、ケイタ君に、ケイイチ君に、ケイジ君か……。三人ともケイがつくんだ。何だか面倒だから、ケイタ君はター君、ケイジ君はジー君、ケイイチ君はイチ君……。それも長いね、ター、ジー、イチでいいよね。」

三人とも今まで名前のケイが同じことに気付かなかった。でもジ―はあんまりに思えた。

「君は何て名前?」

「私はナホミ。」

「じゃナーでいいね。」

「ナーはイヤだよ。せめてナホにして。」

ボクたちは笑ってうなずいた。

ナホミの投げたボールにボクたちは驚いた。ケイタと同じぐらい速くて、コントロールが抜群だった。バットを持たせると、ボクらはもはや呆れてしまった。そうしてその日*ダブルヘッダーがトリプルゲームになり、夕陽が傾くまでボールを追いかけた。やがてナホミがマウンドの上でボールをかざして、

「これがラストボールよ。」

と言って、バットを構えたケイタにむかって投げた。

ケイタの打球はナホミの上に飛んで、それをキャッチしたナホミが大声で言った。

「ゲームセット。」

その澄んだ声がボクたちのゲームの終りを告げるルールになった。

「もう少しやりたいな。」

(2) ボクが言うと、ナホミは嬉しそうに笑って言った。

「見たいものが、君たちに見せたいものがあるんだ。」

「何を?」

ボクたちがナホミを見ると彼女は坂の上を指さした。

かけ出したナホミの後をボクたちは追いかけた。それまで誰一人

坂の上へのぼろうと考えたりしなかった。

息を切らして坂の頂上に着いた時、ボクたちは目の前にひろがった美しい風景に思わず息を飲んだ。

そこにはボクたちの街とボクたちの未来につながる世界がひろがっていた。

「ボクたちの街ってこんなふうになってたんだ。何だかいい気分だね。」

ボクが言うと、ケイタが声を上げた。

「ほら、あそこに野球場が見えるよ。ボクはいつかあのマウンドに立つんだ。」

(3) 「これっていつかボクらの世界になるのかな。」

ケイイチが少し不安そうに言った。

「そうよ。これは私たちの世界でもあるのよ。私たちはまだ小さいな粒子みたいなものだけど、いつかこの世界で大きな存在になるんだわ。」

ナホミが言った。

ボクたち三人はリュウシもソンザイもわからなかったけどチーム

の中にとても強力な選手が加わったことは確信できた。

その夏が終るまで、ボクたちは毎日ボクらの野球場に集合し、一日の終りを眺めに坂の頂上に駆けていった。(4)肩で息をしながら魚のかたりに変わった雲が茜色あかねいろの空を泳ぐのを見ていた。

「私たちはずっと一緒に行こうね。この先どんなことがあってもチームでいようね。」

ナホが言うと、ケイイチが照れたように、

「チームだものね。」

と夕陽に目をしばたかさせた。ボクも声を出した。

(5)「そうだね。今はちいさなリョウシみたいなものだけど、いつか大きなソン、ソン……。」

「ソンザイだよ。リョウシじゃなくてリョウシだよ。私たちの身体も、この街もすべてリョウシからはじまってるんだ。粒子は、μって呼ぶんだよ。」

「ミューって、猫みたいだね。」

「そうだね、仔猫こねこみたいなもんだね。」

それから一年半、ボクたちは四人の時間が合えば早朝、坂下の原っぱに集合して野球を続けた。

(伊集院 静「坂の上のμ」による)

〔注〕 ボーダー——境界。

ポニーテール——髪型の一つ。

ピンストライプ——細い線を用いた縦じま模様。

三角ベースボール——ベースを一つ減らして行う野球。

ダブルヘッド——同じチーム同士が、一日に二試合行うこと。

〔問1〕 (1) ボクたちは互いが手にしたグローブを見て笑い出し、その日からキャッチボールをはじめた。とあるが、この表現から読み取れる「ボクたち」の様子として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 互いに野球の技量に大きな差があることを感じながらも、ほかに相手がいないので仕方なく練習を始めた様子。

イ 同じ場所で野球の練習をしている相手と初めて出会い、気恥ずかしさを感じながらも何とか二人で遊び始めた様子。

ウ 自分と同じように一人で野球の練習をしている相手と出会って親しみを覚え、すぐさま意気投合して遊び始めた様子。

エ 必死にボールを追いかける互いの姿に強く心を動かされ、共にうまくなるうと明るく励まし合って練習を始めた様子。

〔問2〕 (2) ボクが言うと、ナホミは嬉しうれそうに笑って言った。とあるが、このときのナホミの気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア 野球を楽しめる仲間を得られたものの、本当に自分のことを理解してくれているか不安に感じ、新たな提案をして確かめようと思っっている。

イ 自分が言い出した遊びに皆が夢中になってくれたことに喜びを感じ、さらに自分の大好きな風景を見せて感動を分かち合いたいと思っっている。

ウ 一緒に遊んだ「ボク」からゲームに対する率直な感想を伝えられ、喜びながらも照れくささを感じて話題を変えようと思っっている。

エ 野球をさらに続けたいという「ボク」の興奮した様子に驚きながらも、坂の上の風景を見せて気持ちを和らげてあげたいと思っっている。

〔問3〕 (3) 「これっていつかボクらの世界になるのかな。」ケイイチが少し不安そうに言った。とあるが、ケイイチがこのように言っただけとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 眼前の風景を見て、その大きな世界の中に大人になって入っていくことが怖くなり、ずっと子供のままでいたいと思っただけか。

ら。

イ 坂の上に立ち、あまりにも美しい風景に感動するとともに、

その風景を知っていたナホミの存在の大きさに圧倒されたから。

ウ 美しい風景を見ながら、夢中で過ごした一日を振り返り、楽しい時間を共に過ごした仲間をいつまでも失いたくないと考えたから。

エ 眼下の風景を見て、今の自分たちに比べ、いつか踏み出す大人の世界があまりに広く大きいものに思えたから。

〔問4〕 (4) 肩で息をしながら魚のかたちが変わった雲が茜色の空を泳ぐのを見ていた。とあるが、この表現について述べたものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 「ボクたち」が見た夕暮れの空に浮かぶ雲の様子を鋭い感覚でとらえ、細部までありのままに表現している。

イ 無邪気な「ボクたち」の様子と夕暮れの雄大な空の情景とを巧みに描き分け、対照的に表現している。

ウ 「ボクたち」が見た夕空の情景を美しい色彩とともに想像力豊かにとらえ、たとえを用いて表現している。

エ 坂を駆け上がる「ボクたち」の動きとさまざまに変化する雲の様子とをすばやくとらえ、躍動的に表現している。

〔問5〕 (5) 「そうだね。今はちいさなりょうしみたいなものだけど、いつか大きなソン、ソン……。」とあるが、あなたが「ボク」だとして、このときの「ボク」の気持ちをナホミたちに伝えるとしたら、どのように言うか。あなたの話す言葉を五十文字以内でまとめて書け。なお、や、などもそれぞれ字数に数えよ。

四

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印のついている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

二一世紀は生命科学の時代といわれるが、一方では情報の時代ともいわれている。毎日のように、インターネットから情報を入手し、海外の人びととeメールで発信している。距離という制約を超えてコミュニケーションを可能とする情報テクノロジーは、社会構造を変えるほどの力をもっており、二一世紀の社会のあらゆる面で不可欠な要素であることは議論の余地はない。（第一段）

(1) 一方、どこに食糧があるかの情報は重要だが、しかしどんなに正確な情報が得られてもお腹は満たされない。どんなにハイテクの産物としての物、たとえばコンピュータがあっても飢えを救うことはできない。いくら科学技術が進んだからといって、人間は鉄やガラスや紙を食べて生きていくわけにはいかないのだ。人間が食べているのは他でもない他の生物に由来したものである。情報だけではなく、生ものであっても加工したものであっても、ともかく、食糧という物質がなくては、われわれは生きてはいけないのである。

（第二段）

環境問題の解決法として、よく、ゼロエミッションの話が聞かれる。ゼロエミッションとは、産業の製造工程から出る廃棄物を、別の産業の再生原料として利用する「廃棄物ゼロ」の生産システムの構築を目指すことを意味する。地球サミットで「持続可能な発展」が採択されたのを受けて国連大学が提唱した。ゼロエミッションの考えを取り入れた「エコタウン構想」が出され、工場などのゼロエミッション化に積極的な民間企業も増えてきている。（第三段）

限られた資源であるから、物質のリサイクルは大変に重要であるが、もうひとつの因子、エネルギーも考慮に入れなくてはならない。リサイクルに必要なエネルギーがあまりにも大きなものであれば、そのエネルギーを取り出すために、多くの資源を使う必要があるか

もしれず、それがまた、環境を悪化させるかもしれないからだ。仕事の仕事に、あるいは仕事に熱になる効率は理論的には一〇〇パーセントまでいくが、熱が仕事になる効率は原理的にはるかに低い。電力はトースターでパンを焼くことにも、モーターを回転させること(仕事)にも使えるが、炭火ではパンを焼くことはできても、モーターを回転させられない。エネルギーには質があり、高温の熱源は低温の熱源よりも質は高い。こんなエネルギーの質の違いもわれわれは地球の将来を考えるとときに認識しなくてははいけない。(第四段)

重要なエネルギー源として、石油から取り出したガソリン、灯油がある。一方で石油からは多様な化学製品が作り出される。さまざまな製品の基礎原料となるエチレンやプロピレン、ポリエチレンやポリスチレンのようなプラスチック、ポリエステルのような合成繊維や合成ゴムなど、例を挙げればきりが無い。このように、石油はエネルギー源としてのみならず、それ以上に私たちの生活に必要な多くの物質(化学製品)の原料としても有用である。限られた資源である石油は、この両用途の特性、環境問題などもあわせて考えて使うようにしたい。(第五段)

情報が現実の距離を縮めてくれるために、わざわざエネルギーを使って、物質を移動させないですむことが多い。この意味で情報は省エネルギーに大きく貢献しているといえるだろう。二一世紀には、人と人、人と自然の関係を大切にし、情報、エネルギー、物質の三つの観点を総合した知を構築していかなくてはいけないと、考えている。(第六段)

二〇世紀後半に科学が非常に速いスピードで進んだために、さまざまな*軋轢が生じてきた。生活スタイルも、社会の構造も、科学の発達のために、大きく変わってきている。変化のスピードは人類がこれまでに経験してきたものと比較にはならない。長い地球上の

生命の歴史の本の、最後のページの最終行に登場してきた人類であるのに、過去五〇年あまり、三六五日の歴史の中の〇・四秒あまりの短い間に、われわれは地球環境を変え、他の生物との関係も人間同士の関係も変えつつある。(2) それには、当然ながら、光の部分も陰の部分もある。ある方向に科学が進歩してしまつたら、昔はそうではなかったといったところでもうにもならない。現状を認識し、そこからどうしていくのかを考えなければならぬ。(第七段)

二〇世紀後半は科学にとって「知の爆発」の時代であった。生命科学の分野においては、二一世紀もそれは続くであろう。しかし、私たちはいま、科学のもたらす新しい知識や発見、成果をどのように生かし、コントロールしていくかを問われる時代を迎えている。

(第八段)

知の活用の仕方をコントロールするには、知恵が必要である。科学の発達がわれわれにもたらす光の部分と陰の部分を考え、地域の文化・伝統・環境・経済を大切にすると同時に、*グローバルな視点ももたなくてはならない。「時間軸と空間軸の座標」の原点にとどまり、自分や家族、今日明日しか考えないのではなく、一〇〇年前の日本、一〇〇〇年前の世界、人類の誕生、恐竜が闊歩していったころ、生命の誕生、地球の誕生へと過去を遡ったり、逆に何世紀か先の未来へ思いをはせてみたい。また、超ミクロな素粒子や原子・分子の世界を考えてみるのもよい。遺伝、代謝などの生物学的現象、石油からゴムや繊維やプラスチックを作る化学的現象、光や熱が伝わる物理的現象はみな光子、電子、原子、分子の相互作用で起きているのだから。さらに、地球、太陽系、銀河系そして宇宙の果てへと思索の旅をするのもよいだろう。(3) こうした座標の中に置かれて初めて、人類の位置付けや科学のもつ意味を、さらには、科学の進むべき方向を探る知恵が得られるのではないだろうか。

(第九段)

人間は生物でありながら、他の生物や地球との関わりを考えたり、生命とは何か、自己とは何かを考えたりできる唯一の存在であることは間違いないのだから。(第十段)

〔注〕 軋轢——不具合。
あつれき

グローバルな——地球規模の。

〔問1〕 (1) 一方、どこに食糧があるかの情報は重要だが、しかしどんなに正確な情報が得られてもお腹は満たされない。とあるが、筆者がこのように述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 情報テクノロジーによって社会構造を変革することはできず、食糧問題を解決するためには十分な議論が必要であると考えたから。

イ これからの社会に情報は欠くことができないが、人間は他の生物に由来する物質を食糧としなければ生きてはいけなないと考えたから。

ウ 現代において情報は大切な要素ではあるが、食糧などの重要な情報については特にその正確さを見極める必要があると考えたから。

エ コンピュータを用いた情報交換は便利ではあるが、人々が互いに食糧を融通し合うほどの密接な意思疎通はできないと考えたから。

〔問2〕 この文章の構成における第五段の役割を説明したものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア それまでに述べた三つの観点についてそれぞれの例を挙げ、各観点の必要性の順序を明らかにすることによって論を整理している。

イ それまでに述べてきた三つの観点について、それぞれの問題

点を具体例を挙げて明らかにすることで第四段の内容を補足している。

ウ それまでに述べた三つの観点のうち二つを併せもつもの例を挙げ、観点が相互に関連することを示して第六段の内容を導いている。

エ それまでに述べてきた三つの観点から離れ、新たに示した具体例がもつ両用途の重要性を説明することで話題の転換を図っている。

〔問3〕 (2) それには、当然ながら、光の部分も陰の部分もある。とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 科学の発達は人類に恩恵を与えたが、あまりに急激な変化が地球環境や人間と他者との関係に悪影響を及ぼし始めているということ。

イ 科学は近代にめざましい進歩を遂げたが、人類の生活様式や社会の構造はその変化に追いつけないままの状態であるということ。

ウ 人類はかつて着実に科学を進歩させて成果を上げていたが、現在では科学を急速に進歩させること自体が目的になっているということ。

エ 人類は地球に誕生した当初はすべての生物と共存していたが、現在では科学の発達により他の生物を存亡の危機に立たせているということ。

〔問4〕 (3) こうした座標の中に置かれて初めて、人類の位置付けや科学のもつ意味を、さらには、科学の進むべき方向を探る知恵が

得られるのではないだろうか。とあるが、筆者がこのように述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 人類が科学のもたらす陰の部分に光の部分に変えるためには、学問を通して現状を正しく認識する力を養うことが必要だと考

えたから。

イ 人類が科学の知識を増やして他の生物や地球との関係を変え
るためには、自己とは何かを問い続ける思索の旅が有効だと考
えたから。

ウ 人類がさらに科学を発達させていく知恵を得るためには、過
去や現在の成果にとらわれず、遠い未来を見通す研究が必要だ
と考えたから。

エ 人類が自らの影響力を踏まえて科学の成果を正しく活用する
ためには、時間的にも空間的にも広い視点をもつことが不可欠
だと考えたから。

〔問5〕 国語の授業でこの文章を読んだ後、「地球の将来を考える」
というテーマで自分がなすべきことを具体的に示して意見を発表
するものとする。このとき、あなたが話す言葉を二百字以内で書
け。なお、や、や「なども、それぞれ字数に数えよ。

五

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印のついてい
る言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

徒然草の第四十一段は、賀茂の競べ馬の会場のできごとを書い
ている。木に登って居眠りをしている僧を人々が見て「愚かしいこ
とだ。」と批判したのを、(1)「見物している我々も彼と同様に愚かし
い。」と言って兼好がたしなめた話である。

近世の注釈書では、死の到来を忘れてはならないという教訓とし
て解釈された。近代では、兼好がその場で適切な発言をして皆に感
心されたのを自慢して書いた話したり、そんなもつともらしい発
言をしたのに、よい場所を譲ってもらって見物した兼好の行動を言
行不一致したり、あるいはそこにかえって兼好の人間味を感じた
りと、さまざまに解釈されてきた。次に示そう。

五月五日、賀茂の競べ馬を見侍りしに、車の前に雑人立ち隔
て見えざりしかば、おのおの下りて、埒の際に寄りたれど、
殊に人多く立ち込みて、分け入りぬべきやうもなし。

かかる折に、向かひなる棟の木に、法師の登りて、(2)木の股
に突い居て、物見るあり。取り付きながらいたう睡りて、落ち
ぬべき時に目を覚ますこと、度々なり。

これを見る人、あざけりあさみて、「世の痴れ者かな。 * か
く危ふき枝の上にて、安き心ありて眠るらんよ。」と言ふに、
わが心にふと思ひしままに、「われらが生死の到来、ただ今に
もやあらん。それを忘れて物見て日を暮らす、愚かなることは、
なほ増さりたるものを。」と言ひたれば、前なる人ども、「 * ま
ことに、さこそ候ひけれ。 * もつとも愚かに候。」と言ひて、
皆、後を見返りて、「 * ここへ入らせ給へ。」とて、 * 所を去り
て呼び入れ侍りにき。

五月五日に上賀茂神社で行われる競べ馬を見物しようとして、兼好が
牛車に乗って出かけてゆく。到着してみると、既に牛車の前には
人々がびつしりと立ち塞がっている。とても牛車が入り込む隙間
はない。しかたなしに車から下りて、馬場の柵のところまで進もうと
するが、そのあたりは特に混雑していてそれもできない。

その時ふと向こうの棟の木のの上を見ると、一人の僧が木の股に腰
を下ろして見物している。ところが彼は、しっかりと木にしがみつ
いてはいるのだが、居眠りをして落ちそうになっては目を覚ます、
ということを何度も繰り返しているのである。

人々がこの様子を見て「何と愚かなことよ。」とひどく軽蔑する
ので、兼好は心に思ったままに、「私たちだって、いつ死がやって
くるのかわからない。それがたつた今かも知れないのに、こんな見
物をして大事な時間を潰しているではないか。愚かしさということ

なら、私たちの方が上だるうに。」と口にしたのである。

(3) この発言が、思いもよらぬ一言となった。今まで兼好の前に、まるで厚い壁のように立ち塞がっていた人々が、一斉に振り返って兼好の方を振り向いたのである。その瞬間に兼好の生きる世界が変わったことを、私たちは決して見逃すまい。

これまでの兼好は、自分の理想と現実のギャップを主として書いてきた。そこでは兼好自身が感動した聖賢の言葉が書かれることはあっても、兼好が発した言葉が誰かの心を動かすことはなかった。それどころか、周囲を見回しても心を通い合わせる友人もなく、兼好は孤独だった。

なぜ自分は、この世に身の置きどころもないくらい孤独で孤立しているのだろうか。なぜ自分が語る言葉は、相手の心に通じないのか。非常に聡明であればあるほど、現実の矛盾や汚濁、他者の愚かさや醜さに気づいてしまう人間がいる。彼にとっては、現実よりも書物の世界の方が、より一層身近で親密な心安らぐ場所であった。

しかし、現実と隔てられた世界にいつまでも留ま^{とど}ま^まってよいのだろうか。そのように考え始めた兼好の心に、ある日の賀茂の競べ馬のできごとが蘇^{よみがえ}ってくる。(4) この日の体験こそは、言葉によって自分が生身の人間とのコミュニケーションを成立させた、記念すべき日だった。

もしも兼好が人々のせつかくの申し出を断り、踵^{かかと}を返してこの場から立ち去ったならば、再びかたくな自分の殻の中に逆戻りするところだった。しかし兼好は人々が開けてくれた場所に入って、名も知らぬ庶民たちと一緒に、賀茂の競べ馬を楽しんだのである。この行動を、「よい席を空けてもらってちゃっかり見物して、いい気なものだ。」としか読めないとしたら、それで徒然草を読んだことになるだろうか。

(島内裕子「兼好」による)

〔注〕 かく危ふき枝の上にて、安き心ありて眠るらんよ。——こんな

に危ない枝の上で、どうして平穩な気持ちで眠っているのだらうよ。

まことに、さこそ候ひけれ。——本当にそのとおりでした。

もつとも愚かに候。——いかにも愚かなことでございます。

ここへ入らせ給へ。——ここへお入りになってください。

所を去りて呼び入れ侍りにき。——場所を空けて、呼び入れました。

〔問1〕 (1) 「見物している我々も彼と同様に愚かしい。」と言って兼

好がたしなめた話である。とあるが、ここでいう「たしなめた」の意味に最も近いのは、次のうちではどれか。

ア それとなく戒めた イ すぐさま反論した

ウ あからさまに軽蔑した エ ひどく腹を立てた

〔問2〕 (2) 木の股に突^{また}に突^つき居^みて、物見るあり。とあるが、この部分の現代語訳に相当する部分を、本文中から二十字以内でそのまま抜き出して書け。なお、や。もそれぞれ字数に数えよ。

〔問3〕 (3) この発言が、思いもよらぬ一言となった。とあるが、「この発言」に相当する箇所が、本文に引用されている「徒然草」

の原文中にある。その発言の初めの五字をそのまま抜き出して書け。なお、「も」字数に数えよ。

〔問4〕 (4) この日の体験こそは、言葉によって自分が生身の人間とのコミュニケーションを成立させた、記念すべき日だった。とあるが、「言葉によって自分が生身の人間とのコミュニケーションを成立させた」とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 書物の言葉に頼るだけではなく、相手との言葉のやりとりを通して、今までの生き方に誇りを抱きつけかけをつかんだということ。

イ 書物を著した人物との対話ではなく、心の通じ合った相手と言葉を交わすことで、現実の世界を変えることができたということ。

ウ 書物に書かれた言葉だけではなく、自分が語った言葉さえも、相手の愚かさを責めるものだとすることに初めて気付いたということ。

エ 書物に記した言葉ではなく、現実が発した言葉が相手の共感を呼び、自分の生きる世界を変えるほどの言葉が返ってきたということ。

〔問5〕 かえって とあるが、これと同じ意味・用法で「かえって」を用いて、三十字以上四十字以内で文を作れ。なお、や。などもそれぞれ字数に数えよ。

平成20年度

解答用紙

国

語

(注) この解答用紙は編集上の都合により、使用153頁物を約65%に縮小してあります。使用の際は拡大コピーによりほぼ原寸大で使用する事ができます。

1	いた				
	(1) 乾いた (2) 花壇 (3) 聴い (4) 草窓 (5) 米冠				

2	べ				
	(1) シラベ (2) バイリン (3) アびる (4) ハイク (5) ヨチヨウ				

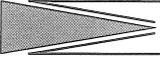
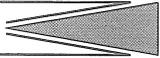
3	(問1)	(問2)	(問3)	(問4)	
	(問5)				

4	(問1)	(問2)	(問3)	(問4)	
	(問5)				

5	(問1)				
	(問2)				
	(問3)	初めの五字			
	(問4)				
	(問5)				

記
点

1 (計10点)					2 (計10点)					3 (計25点)					4 (計30点)					5 (計25点)				
(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	問1	問2	問3	問4	問5	問1	問2	問3	問4	問5	問1	問2	問3	問4	問5
2点	2点	2点	2点	2点	2点	2点	2点	2点	2点	5点	5点	5点	5点	5点	5点	5点	5点	5点	10点	5点	5点	5点	5点	5点


国語

解答

- 一 (1) かわ (2) かだん (3) いこ
(4) しゃそう (5) えいかん
- 二 (1) 調 (2) 梅林 (3) 浴 (4) 俳句
(5) 予兆
- 三 [問1] ウ [問2] イ
[問3] エ [問4] ウ
[問5] (例)仲間は大切だね。今は個々の小さな存在だけど、人とのかわりを広げていつか大きな存在になるんだね。(48字)
- 四 [問1] イ [問2] ウ
[問3] ア [問4] エ
[問5] (省略)
- 五 [問1] ア
[問2] 木の股に腰を下ろして見物している。
[問3] 「われらが [問4] エ
[問5] (例)そのくらいの距離なら、タクシーに乗るよりも、かえって歩いた方が早い。(34字)

一 [漢字]

- (1)音読みは「乾燥」などの「カン」。 (2)他と区切って草花を植えてある場所。 (3)音読みは「休憩」などの「ケイ」。 (4)汽車・電車などの窓。 (5)勝利や榮譽。

二 [漢字]

- (1)音読みは「調子」などの「チョウ」。 (2)梅の林。 (3)音読みは「入浴」などの「ヨク」。 (4)「俳」の字には、こっけい、という意味がある。 (5)物事が起ころうとする前触れ。

三 [小説の読解] 出典；伊集院静『坂の上のμ』。

[問1]＜文章内容＞「ボク」もケイタも、河原で「一人ボールを空に放りながら追いかけている少年」だった。だから、出会うとすぐに気持ちが通じ合って、二人でキャッチボールをするようになった。

[問2]＜心情＞「もう少しやりたいな」という「ボク」の言葉に、ナホミは、自分が提案した三角ベースボールのルールを「ボク」たち三人が気に入り、お互い意気投合できたことを感じ、満足した。そこで、坂の上に上って、「ボク」たちといっしょに、自分たちの街の風景の美し

さに酔いしれようと思ったのである。

〔問3〕〈文章内容〉眼下に広がっていたのは、「ボクたちの街とボクたちの未来につながる世界」だった。ケイイチは、その世界の雄大さに、少しおじけづいたのである。

〔問4〕〈表現〉夕焼けの空に流れる雲を、「魚のかたちに変った雲が茜色の空を泳ぐ」と色彩感豊かに、比喩を用いて表現している。

〔問5〕〈心情〉「リュウシ」は、自分たち一人一人の小さな存在を表している。今は、一人一人小さな存在だけど、やがて人とのつながりの中で、自分たちも大きな存在になっていくことなどが述べられればよいだろう。

〔四〕〔論説文の読解—自然科学的分野—科学〕出典；黒田玲子『科学を育む』。

〈本文の概要〉二十一世紀の社会では、情報テクノロジーは、社会のあらゆる面で不可欠であろう。しかし、どんなに正確な情報が得られても、食糧そのものがなければ、人間は生きていけない。さらに、環境問題に配慮し、限られた資源を効率よく有効に使わなければならない。二十一世紀には、情報、エネルギー、物質の三つの観点を総合した知を構築していかなければならないのである。知の活用の方をコントロールするには、知恵が必要である。そのためには、科学の発達が我々にもたらす光と陰の部分を考え、時間的にも空間的にもさまざまな視点をもたなくてはならない。人間は、生命とは何か、自己とは何かを考えられる唯一の存在なのである。

〔問1〕〈文章内容〉二十一世紀の社会では、情報は重要度を増してくるであろうが、人間が生きるには、やはり食糧が必要である。科学が発達しても、食わずには生きていけない。

〔問2〕〈段落関係〉第五段落では、情報、エネルギー、物質の三つの要素のうち、人間の生活のエネルギーと物質の両方にかかわる石油を例にとり、「三つの観点を総合した知を構築して」ゆく必要性を述べた第六段落へと論をつなげている。

〔問3〕〈文章内容〉科学は、人間にさまざまな恩恵をもたらしたが、同時に「二十世紀後半に科学が非常に速いスピードで進んだために、さまざまな軋轢が生じてきた」のである。科学の「陰の部分」とは、人間と「他の生物との関係」や地球環境の問題である。

〔問4〕〈文章内容〉科学を活用するためには

「知恵が必要」なのである。その知恵を得るには、「『時間軸と空間軸の座標』の原点にとどまり」、時間的にも空間的にもさまざまな視点からものを考えることが必要なのである。

〔問5〕〈作文〉与えられた課題に対し、明確な論旨で書くことを心がける。読みやすい文章になるよう、一文一文を短くするなど心がけたい。また、主述の対応や、表記に誤りがないことは鉄則である。

〔五〕〔説明文の読解—芸術・文学・言語学的分野—文学〕出典；島内裕子『兼好』。

〔問1〕〈語句〉「たしなめる」は、反省を促す、という意味。

〔問2〕〈現代語訳〉「突い居る」は、もともと、ひざを突いてすわる、という意味。ここでは、腰を下ろす、という意味。

〔問3〕〈古文の内容理解〉「この発言」とは、兼好の「私たちだって、いつ死がやってくるのかわからない～愚かしさということなら、私たちが上だろうに」という内容の発言である。原文では、「われらが生死の到来、ただ今にもやあらん～愚かなることは、なほ増さるもの」の部分がこれに当たる。

〔問4〕〈文章内容〉この体験まで、「兼好が発した言葉が誰かの心を動かすことはなかった」のである。それがこの発言により、「今まで兼好の前に、まるで厚い壁のように立ち塞がっていた人々が、一斉に振り返って兼好の方を振り」向き、兼好の言葉に共感した人々は、場所まで空けてくれたのである。兼好は、この体験により、「名も知らぬ庶民たち」の中に入っていくことができたのである。

〔問5〕〈作文〉「かえって」は、むしろ逆に、という意味を表す。